

【研究ノート】

ソ連民族学におけるエトノスの「不定形な構造」  
— 『自然』論争 (1970-71) から見るロシア的民族観 —

三 栖 大 明

要 旨：本稿では、1970-71年にソ連の科学誌『自然』にて行われた論争の分析を通して、当時のソヴィエト民族学で使用された「エトノス」という語の指示内容を明らかにする。エトノスは帝政末期に民族学用語として登場したもので、スターリン期に一時使用が途切れたものの、1960年代後半から理論研究が盛んに行われるようになった。特にL. N. グミリョフとIu. V. ブロムレイは代表的な理論家と考えられているが、1970年の『自然』誌上で両者は衝突し、ソ連で初めてエトノスという用語を巡る議論が交わされることとなった。従来、両者の論争ではエトノスが「生物学的」なものであるか「社会的」なものであるかが争われたとされてきたが、論争において具体的に何が生物学的・社会的とされていたのかについては十分明らかにされていない。本稿では『自然』における言説を分析することを通して、この論争に3つのテーマが存在したことを明らかにするとともに、論争参加者たちの発言に見られる独自の民族観に注目する。ソ連におけるエトノス概念は一般に原初主義的性格をしていたと考えられているが、本稿の結論からはその内実が潜在的にあらゆる集団を指示し得る「不定形な構造」をしており、一面において柔軟な道具主義をも反映していたことが明らかとなるだろう。

キーワード：エトノス、民族学、グミリョフ、ブロムレイ、ソ連民族学

1. はじめに

2022年、ロシアの民族学ジャーナル『民族学評論』においてソ連期に形成された民族理論が現代ロシアに及ぼす影響についての特集が生まれ、V. A. ティシコフら著名な学者たちが意見を寄せた。この特集に寄稿した論者によれば、ソ連期の民族学者L. N. グミリョフの著作がロシア語圏においてはC. レヴィ＝ストロースやE. タイラーよりも引用されており、また彼の論敵でソ連科学アカデミー民族学研究所の所長を務めたIu. V. ブロムレイの著作もこれに次ぐ頻度で参照され続けているという (Verkhovtsev 2022 : 86)。奇しくもウクライナ侵攻と同年に出版されたこの特集では、ソ連崩壊期から構築主義者によって批判されてきたグミリョフらの議論が、学術理論としては既に古びたものであるにもかかわらず、未だ社会的影響力を保持していると指摘された。そうした観点から、ソ連期の民族学言説を分析することは現代ロシアの民族観を理解する上で不可欠だと考えられる。著者は既に拙著においてロシアにおける民族学史について検討したが (三栖 2024a)、本論文はその中で触れたグミリョフらの論争を個別に分析し、「エトノス (etnos, этнос)」という用語を巡って交わされた当時の議論を掘り下げるものである。

1970年から翌年にかけて、ソ連の自然科学雑誌『自然 (Priroda, Природа)』においてエトノスを巡る論争が行われた。エトノスとは英語の ethnicity と同じくギリシア語に由来するロシア民族学用語で民族を意味する。ロシアにおけるエトノスという語の初出はウクライナ出身の民族学者N. M. モギリャンスキーによる『民族学の対象と課題』(1916年)であるとされ、ツングース研究者として知られるS. M. シロコゴロフが1923年に初めて理論書を出版した (Anderson et al 2019)。1920年代後半になると民族学が反ソ的なブルジョワ科学とされたことでこの用語の使用は一時途切れるが、1960年代以降、エトノスをテ

一マとした理論研究が盛んに行われた。1970年の『自然』での論争（以下、『自然』論争）はこの文脈において行われたものである。この論争ではグミリョフのエトノス論が批判され、その後約20年にわたる彼とブロムレイとの衝突の端緒となった<sup>1</sup>。1971年に『自然』編集部はこの論争でエトノスが生物学的範疇なのか社会的範疇なのか争われたと総括しているが（Priroda 1971: 71）、この『自然』論争を通して形成されたグミリョフのエトノス論が「生物学的」でブロムレイのそれが「社会的」であるという分類はソ連期の民族学を語る上で一定のパラダイムをなしている（井上ほか 1991: 199；田中 2001: 271；Arutiunian et al 1998: 32-33；Sokolovskii 2022: 114）。

しかし、この論争で語られたグミリョフとブロムレイの議論はそれぞれ両義的なものであり、どこにエトノスの生物学的もしくは社会的性質を見るのかという論点は必ずしも噛み合っていない。例えば、グミリョフは史的唯物論からエトノスを説明しない点では「生物学的」と言い得る一方、エトノスの遺伝的性質については形質上の遺伝を重視しておらず、その点では必ずしも「生物学的」ではない。後述するように、同様の捻じれはブロムレイの議論にも見られるものである。むしろ、史的唯物論に対する態度やエトノスを定義する基準に相違はあるものの、両者の議論には複数の共通点があり、共にエトノスを多様な集団から成る単位だと捉えていた。同様の民族理解は他の論争参加者にも見られるものであり、論者の一人 M. I. アルタモノフはエトノスとは多様な形態を取り得る「不定形な構造（amorfnaiia struktura, аморфная структура）」なのだ指摘している。

本稿では、『自然』論争の分析を通じて、グミリョフとブロムレイによるエトノスの「生物学的理解と社会的理解の対立」という従来の構図を問い直す。まず、2. で論争の経緯を説明するとともに、3. で論争の発端となったグミリョフ論文「エトノスの発生とエトノス圏」の分析を通して『自然』論争が3つの争点（エトノス定義、史的唯物論、エトノスの遺伝的性質）を巡って行われたものであることを明らかにする。その上で、4. -6. では各争点に関する論争参加者たちの言説を分析する。ここからは従来の構図が部分的にしか成立しないこと、またエトノスを認定する基準に統一性が欠如しており、潜在的に多様な集団を民族と捉え得る可能性があったことが明らかとなるだろう。S. S. アリイモフらは帝政期から現代に至るまでロシア民族学に通底する原初主義的に民族を分類・記述する傾向を「エトノス思考（etnos-thinking, etnos-myshlenie, этнос-мышление）」と呼んでいるが（Anderson et al 2019）、『自然』論争の事例からわかるように、この原初主義的なエトノス思考は一面において柔軟な道具主義をも反映してもいたと考えられる。

## 2. 論争の経緯と先行研究

『自然』論争は1970年の『自然』第1号・第2号に2回に分けて掲載されたグミリョフの論文「エトノスの発生とエトノス圏」に端を発するもので、この論文は当時の主要な民族学者らの間にエトノスを巡る議論を呼び起こした。1960年代後半からグミリョフは独自のエトノス論を既に提唱していたが、彼の論文は主に『レニングラード大学紀要』に投稿され、限られた読者の間で読まれるに過ぎなかった。こうした中、大衆科学誌である『自然』への論文掲載はグミリョフの議論が初めて多くの眼に触れる機会となり、結果として民族学研究所の所長ブロムレイを始めとする学者たちから反論が寄せられることとなった。1970年の『自然』第2号に「エトノスの発生とエトノス圏」後半部が掲載される

と、これに続く形でプロムレイの反対論文が同時に掲載され、同年の『自然』第8号にグミリョフ論文に対するレビューが3篇寄せられた。そして、翌71年の『自然』第2号ではグミリョフを含む6名の学者が議論に参加することとなる。

従来の研究において、『自然』論争は主にグミリョフの伝記上の出来事として語られるに留まり、論争の経緯に焦点が当てられてきた。例えば V. A. コレニャコが指摘するように、この出来事はソ連末期まで続くグミリョフ批判の開始点となった。彼によれば、『自然』1970年第8号に寄せられたレビューは全てグミリョフが活動するレニングラードの学者によるものであり、グミリョフ自身が組織したものではないかとの疑惑が広がった。結果として『自然』1971年第2号でエトノスに関する特集が組まれたものの、グミリョフに好意的な意見を寄せたのはチベット学者 B. I. クズネツォフのみで、他の論者は皆批判論文を寄せたという (Koreniako 2006 : 25-26) <sup>2</sup>。一方、M. バッシンは、『自然』論争におけるグミリョフ批判を代表するものとして V. I. コズロフの見解をとりあげている。バッシンによれば、コズロフによるグミリョフ批判は、①エトノスを自然的範疇とすることへの批判、②エトノスの生物学化への批判、③地理決定論への批判、の3要素から成るといふ (Bassin 2016 : 168-169)。

このように『自然』での論争は論争の経緯が主に注目され、内容に関しては一部の参加者の見解に焦点が当てられてきた。しかし、論争参加者のグミリョフ批判には大きなばらつきがあり、バッシンのようにコズロフ一人を全見解の代表として捉えることには問題があると考えられる。また、コズロフのグミリョフ批判にはバッシンが指摘する要素以外にも本稿で指摘するエトノス定義・史的唯物論を巡る論点があることが見過ごされている。次節では、論争の発端となったグミリョフ論文が実際にはどのような論点を提示するものであったのかを示し、『自然』論争で「エトノスは如何にして定義されるか」「史的唯物論からエトノスの変化過程を説明できるか」「エトノスに遺伝的性質はあるのか」という3点が争われていたことを明らかにする。

### 3. 『自然』論争に見られる3つの争点

2年に渡る論争の発端となったグミリョフによる論文「エトノスの発生とエトノス圏」は、2回に分けて『自然』1970年第1号、第2号に掲載された。大まかな論旨としては、第1号で史的唯物論や地理決定論では説明できないエトノス独自の発展法則の存在が示唆され、第2号ではそれが熱情性であるとの議論が展開される。熱情性 (passionarnost', *пассионарность*) とは、「外界のエネルギーを吸収し事業の形で排出する有機体の器官上の機能」を指し、この機能はグミリョフが熱情者と呼ぶ少数の人々を新たなエトノス創造につながる行為に駆り立てる。グミリョフによれば、熱情者の行為は従来の行動規範からの逸脱であり、彼らは伝統の慣性を破り新たなエトノス創造の動因となる行為を完遂する。また、熱情者による環境改変は自然環境のみならずエトノス内部の関係性にも及ぶ。グミリョフは熱情性をもたらすエネルギー動因について、V. I. ヴェルナツキーの生物圏理論を引き合いに出しつつ説明した (Gumilev 1970b : 46, 50)。

「エトノスの発生とエトノス圏」中には大きく2つの論点が存在する。第1の論点は言語や文化、人種の特徴などの指標から民族を定義することが可能か否かについてである。この問題についてグミリョフは次のような譬え話から議論を開始した。この譬えの中でグ

ミリョフは、民族的帰属のみが異なる4人の男性（ロシア人、ドイツ人、タタール人、アルメニア人）を登場させる。彼らは外見、食べ物、利用するメディア、教育水準などの点で客観的に見て相違がないとグミリョフは想定する。そして、この4人が同じトラムに乗り合わせ、何らかの事件に巻き込まれると、客観的な同質性にもかかわらず全く異なる行動を示す（Gumilev 1970a : 46）。グミリョフによれば、この行動面の差異は民族的帰属と結びついている。それは言語、文化、人種の特徴といった指標の同一性とは無関係に存在しているものであり、その意味でグミリョフはこれらの特徴から行われる民族定義とは相反する理解を提起していた。スターリンによる民族定義以来、ソ連では言語を始めとする特徴の集合体として民族を捉える伝統があったが、グミリョフの立場はそうした潮流から外れるものであったと考えられる。

第2の論点は史的唯物論が前提する社会の発展法則と民族の発展プロセスの不一致である。ソ連において、民族学はマルクス主義歴史学の下位分野に位置づけられていた。この歴史学においては、社会の生産力によって文化様態が規定されるとする史的唯物論が支配的な地位を占めていた。この観点から、ソ連民族学においては社会が未開社会から奴隷制、封建制、資本主義、社会主義へと発展すると考えられ、各発展段階に応じて「上部構造」たる民族共同体も氏族、部族、亜民族、民族へと進化するとされた（井上 1995）。これに対してグミリョフは、同じエトノスが複数の社会形態に存在するなどの事例を挙げ、エトノスの変遷過程が史的唯物論と対応していないと指摘した。グミリョフによれば社会と民族の発展過程は異なるもので、前者が世界規模であるのに対して、後者は地域的だという。グミリョフはエトノスが進化するプロセスの地域性を説明する文脈で景観<sup>3</sup>と呼ばれる地理的条件を強調している（Gumilev 1970a : 46, 50-54）。景観や熱情性についての議論は史的唯物論に代わるオルタナティブ的説明を提示するもので、一種の史的唯物論批判だと考えることが可能である。このように、議論の発端となったグミリョフ論文には①言語、文化などの指標に基づくエトノス定義の否定と②史的唯物論批判という2つの論点が存在していた。

「エトノスの発生とエトノス圏」にはさらにもう1点、論争で槍玉に上げられた要素が存在する。それは、グミリョフが提示した諸概念（熱情性など）に見られる「生物学的」（特に遺伝学的）要素である。ただし、この点について留意する必要があるのは、グミリョフが必ずしも生物学的とは限らない内容を持つ議論に生物学的な根拠づけをしていたという点である。例えば、グミリョフは従来とは異なる規範で動く少数者が社会規範を変容させることで集団の性質が変化して新たな民族が生まれると論じており、この議論そのものは生物学的とは言えない。しかし、彼はこの現象の原因が有機体の機能たる熱情性だと説明し、エネルギー動因としてヴェルナツキーの生物圏理論を持ち出している。このように、グミリョフは生物学的とは限らない自身の主張を生物学的に説明していた。このことから論争に参加した論者の多くはグミリョフがエトノスを生物学単位として捉えていると批判した<sup>4</sup>。後述するように、特に行動規範の世代間継承に関するグミリョフの議論は、彼が行動遺伝学を論拠としたことも相俟って、エトノスに遺伝的性質があると主張するものとして物議を醸した。

以上に述べたように、グミリョフの論文「エトノスの発生とエトノス圏」には2つのテーマ（エトノス定義と史的唯物論へのオルタナティブ的説明）が存在し、またこの論文で

グミリョフは社会関係の所産としてエトノスが生まれると受け取れる議論にエネルギー動因などの観点から「生物学的」説明を行っていた。このようなグミリョフのエトノス論を巡って発生した『自然』論争について、次節からは以下の3点に注目して分析を行う。まず①エトノス定義の問題、次に②史的唯物論を巡るイデオロギーの問題、そしてグミリョフが提示する議論における③エトノスの遺伝的性質を巡る問題、である。『自然』論争において以上の3点はともに「エトノスが生物学的か社会的か」という表現を通して語られたが、本稿では各論点を個別に分析することを通して、『自然』論争が「生物学的」「社会的」という分類では捉え切れないものであることを示す。その上で、主要な論者の議論を整理し直すことで、論争に登場したエトノス概念が任意の集団を指示し得る不定形なものであったことを示す。

#### 4. エトノス定義を巡る論争

グミリョフが「エトノスの発生とエトノス圏」において示したエトノス理解は言語、文化、人種的特徴などに基づく定義を否定するものであった。まず彼は、時代・地域に関係なく全ての民族集団に普遍的に該当する特徴として「我々/彼ら」の対置を挙げ、場合によってはかなり遠くの人々をも「自分のもの」と捉えて他の集団と区別することが人間の特性であるとした。この対置をもたらす要因として、まずグミリョフは言語、文化、イデオロギー、経済、起源といった指標の共通性が機能するか否かについて論じている。例えば言語について、グミリョフは多言語を用いるエトノスの存在や同一言語が複数のエトノスで話されているなどの事例を挙げ、エトノス構成員が「我々」と「彼ら」の差異を意識する上で言語が普遍的な指標ではないと述べる。そして、同様のことが他の全ての指標にも該当するとグミリョフは指摘する (Gumilev 1970a : 47-49)。

言語、文化などの指標に代わってエトノスを規定するのは「行動のステレオタイプ (stereotip povedeniia, стереотип поведения)」であるとグミリョフは述べる。グミリョフによれば、行動のステレオタイプとは、集団と個人の間および個人間の関係を規定する規範 (norma, норма) もしくは行動規範 (norma povedeniia, норма поведения) であり、生活と慣習の全領域で密かに存在する。或るエトノスにおいて行動のステレオタイプは時代ごとに唯一あり得る社会生活の方法と思われるため、そのエトノスの成員にとって重苦しいものではなく、意識されることはない。反対に、或るエトノスの成員が他のエトノスの行動のステレオタイプに触れると驚きや当惑を感じ、同胞に他民族の奇行を語るという (Gumilev 1970a : 49)。或るエトノスの構成員が他のエトノスとの間で「我々」と「彼ら」の差異を意識するのはこの行動のステレオタイプの差異によってだという。

このようにグミリョフは客観的な文化的・身体的特徴よりもコミュニティごとの行動規範を重視してエトノスを定義しているが、論者の多くはこれらの指標を重視する立場からグミリョフを批判した。まず、ブロムレイはグミリョフが言語や文化といった指標をエトノス定義から外していることを問題視し、これらの指標がエトノスを定義する不可欠の要素でないのはいいことに、グミリョフがその重要性を無視していると指摘した。またブロムレイによれば、エトノスは自身の一体性を自覚する (つまり、我々意識・民族意識を持つ) ものだが、グミリョフはそのことを考慮していないという (Bromlei 1970 : 55)。

ブロムレイによれば、民族共同体の基礎には「我々」と「彼ら」の対置 (ブロムレイの

表現ではアンチテーゼ)があり、エトノスの特徴として安定性と明瞭性が挙げられるという。これらの特徴は何らかの指標によってもたらされるとした上で、ブロムレイは当時の主要な民族学者が挙げたエトノスを規定する指標を列挙する。それは言語、文化、領域、民族意識、心理構造、起源、国家的帰属、そしてグミリョフの挙げる心理的ステレオタイプ (psikhicheskiĭ stereotip, психический стереотип) の8つであるという (Bromlei 1970 : 51-52)。この箇所に見られるように、ブロムレイはグミリョフの言う行動のステレオタイプを「心理的ステレオタイプ」と言い換えている。

ブロムレイはここでエトノスを狭義のものと広義のものに分ける必要性を提唱する。ブロムレイによれば、移民など民族移動が起こったとしても失われることのない民族共同体の核 (エトノス核 *etnos-iadro*, этнос-ядро) が「狭義のエトノス」であり、特別な安定性を備えているという。狭義のエトノスを構成する指標として、ブロムレイは広義の文化 (言語、物質文化、慣習、口承文芸など)、心理構造、民族意識、族内婚の4つを挙げる。そして、最終的にブロムレイは狭義のエトノスを次のように定義する。「エトノスとは狭い意味において、共通の比較的安定した文化の独自性と然るべき心理構造、また自身の一体性への意識と族内婚を伴う人間集団と定義できるだろう」。そして、狭義のエトノスが国家などの社会組織と結びつく時、氏族、部族、民族といった「広義のエトノス」(エトノス社会有機体、後述)になるとブロムレイは主張する。これに補足して、エトノス核は純粹な形で存在しないとブロムレイは述べている。彼によれば、エトノスは景観のような自然環境や国家などの社会環境によって変化するものであり、両環境はエトノス発生条件であるという (Bromlei 1970 : 52-55)。

一方で、コズロフは、グミリョフがエトノスを歴史的に登場した人間共同体の唯一のカテゴリーと捉え、人種共同体や宗教共同体をエトノスとして扱っていると批判した (Kozlov 1971 : 72)。コズロフによれば、人種が民族に近似するのはアメリカの黒人などに限られる上、グミリョフがエトノスの一例として挙げるシク教徒 (16世紀にイスラム教の影響を受けヒンドゥー教から分岐したインドの信仰集団) はエトノスではないという。グミリョフによれば彼我の対置があればどのような集団でも潜在的にエトノスと見做し得るのであり、この観点から見ればシク教徒もエトノスたり得る。これに対し、コズロフは宗教的帰属と民族的帰属を分けて考えている。コズロフによれば、エトノスとは「歴史的に形成された人々の社会的共同体である」と定義され、エトノスの形成には言語と領域が寄与するという。ただし、この定義上の観点からコズロフは、もし宗教共同体が独自の領土と同一言語で話す構成員から成るならばエトノスと区別するのは難しいとも述べている (Kozlov 1971 : 73-74)。一方、信仰集団とエトノスの関係については、ブロムレイがコズロフとは異なる議論を行っている。ブロムレイはシク教徒や古儀式派 (17世紀に成立したロシア正教の分派集団) が族内婚を特徴とするとして、族内婚が成立する集団には民族的性質が見られると述べている (Bromlei 1969 : 90)。その点、彼はグミリョフと同様にシク教徒を民族集団と見做していた。また、別の著作でグミリョフはブロムレイと同じく古儀式派をエトノスの範疇に含めている (Gumilev 2018 : 56-58)。

アルタモノフもまたグミリョフによるエトノス定義を批判している。例えば、グミリョフは自身の論文の中でローマ国家の歴史をローマ人の歴史と同一視する記述を行っていたが、アルタモノフによればローマ市民であることとローマ民族であることは異なるという。

また、彼によればビザンツ人（中世ビザンツ帝国の住民）がエトノスとなったのはビザンツ帝国の成立によるものではない（Artamonov 1971 : 77）。これに対してグミリョフは、ビザンツ人は独自の行動のステレオタイプを有し、自身を全ての他者に対置していた点で同時代人の眼にはエトノスだったのであり、ギリシア人やアルメニア人、スラヴ人の単なる混合ではないと反論している（Gumilev 1971 : 82）。

このように、グミリョフはどのようなレベルであれ、我々意識が存在し共通の行動のステレオタイプが備わっていれば如何なる集団でもエトノスと見做す立場をとっている。これに対して、アルタモノフは国家の住民（国民）であることと特定の民族であることを分けている。アルタモノフによれば、エトノスは生存条件の変化やエトノス同士の混合から生まれるという（Artamonov 1971 : 77）。後述するように、彼はエトノスを血縁と結びつくものとして理解しており、グミリョフのように社会規範の共有や仲間意識といった要素だけではエトノスを規定し得ないと考えている。グミリョフにとっては、ビザンツ人というエトノスが成立するためには我々意識をもたらす枠組みとしてビザンツ国家が存在するだけでよかった一方、アルタモノフの場合はそれだけでは足りず、ギリシア人を始めとする諸集団が混交し、新たな単位（ブロムレイ風に言えば族内婚単位）が成立しなければならなかった。逆に言えば、そうした単位さえ成立すれば、ビザンツ人もエトノスたり得ると言える。その意味で、アルタモノフは遺伝的な繋がりを民族の基礎的条件と見做していたと言えるだろう。

一方で、アルタモノフはブロムレイに対してはエトノスを規定する上での基準の厳密さについて批判を行っている。彼によれば、ブロムレイが言うようにエトノスを狭義と広義に分けて論じる必要はなく、またブロムレイが挙げた心理構造、族内婚、民族的一体性への自覚といった要素は蛇足であるという。エトノスは単に「比較的安定した文化的特性を備えた人々の集合体」であり、部族、部族連合、国家、教会、政党など任意の形態をとる「不定形な構造（amorfnaia struktura, аморфная структура）」であるとアルタモノフは述べた（Artamonov 1971 : 76-77）。これに対してブロムレイは、特定の文化が及ぶ範囲はエトノスの範囲と一致するとは限らないのだから、文化的特性からエトノスを規定するアルタモノフの見解には賛成できないとした。ブロムレイによれば、エトノスが存在するのはその構成員が自身の一体性を意識している間だけであり、そこからエトノスは「自覚的な文化共同体」と理解されるという（Bromlei 1971 : 83）。

以上のように、『自然』論争では行動規範に基づく我々意識に依拠したグミリョフのエトノス定義と言語や文化などの指標をより重視する定義が対立していた。後者にとって、言語や文化といった指標を用いないグミリョフの立場は実質的にあらゆる集団を民族と見做すものであり、「エトノスを歴史的に登場した人間共同体の唯一のカテゴリーと捉えている」（コズロフ）と思われたのである。他方、グミリョフへの批判にもかかわらず、アルタモノフは場合によっては宗教団体や政治結社さえエトノスたり得るとしており、民族が任意の形を取る「不定形な構造」なのだとする点でグミリョフと共通していた。同様の傾向は、シク教徒やビザンツ人についての論者たちの見解にも表れているだろう。行動規範（グミリョフ）、族内婚・混交（ブロムレイ、アルタモノフ）、領域・言語（コズロフ）の共有といったように、ある集団をエトノスと認定する基準は異なるものの、いずれの論者もこれらの集団がエトノスたり得ると考えていた<sup>5</sup>。このように、エトノスを定義する

基準や方法にはコンセンサスがなかった一方で、多様な集団をエトノスの範疇に含める点では論争参加者に一定の共通性が見られたと言える。

## 5. 史的唯物論を巡る論争

第2の論点はグミリョフによる史的唯物論批判である。既に述べたように、グミリョフによれば、史的唯物論が語る社会の発展が世界規模であるのに対して、エトノスの発展は地域的であり、両者は一致しない。エトノスの変異を地域的に引き起こすのが、グミリョフによれば景観である。景観的に様な地域ではエトノスは安定し、逆に地理的变化に富む領域では変異が促進され新たなエトノス出現に繋がるとグミリョフは述べている。一方で、景観はエトノス発生の一助に過ぎないとし、より根本的な原因として熱情性を挙げている (Gumilev 1970a : 54)。「エトノスの発生とエトノス圏」でグミリョフが提示したこのような史的唯物論に対するオルタナティブの説明には史的唯物論を擁護する立場からコズロフとブロムレイが批判を寄せた。

まず、コズロフによればエトノス構成員の同一性は生物学的なものではなく社会的範疇に属するものだという。この点に関して、元々居住していた景観を越えて拡大したロシア人が地理的条件の変化にもかかわらずロシア人のままであることをコズロフは挙げ、景観のような自然環境が民族の変化を規定する条件ではないと述べた。またコズロフは、エンゲルスの『家族、私有財産、および国家の起源』を引用し、自然条件とは無関係に全てのエトノスに氏族/部族段階が存在すると主張することで熱情性がエトノスの発展過程に影響していないと指摘している。続けてコズロフはエトノスの発展過程と社会の発展法則が一致しないというグミリョフの問題提起を俎上に上げる。コズロフはこの不一致を前階級社会と資本主義社会の差異から説明し、エトノスに内在する生物学的法則に由来するものではないと述べている (Kozlov 1971 : 71-73) 6。

一方でブロムレイは、エトノスを狭義のものと広義のものに分けることでグミリョフの史的唯物論批判に反論した。ブロムレイによれば、社会の各発展段階において狭義のエトノスが何らかの領域的、社会経済的、政治的組織として存在する場合には、部族、亜民族、民族といった広義のエトノス (エトノス社会有機体 *etnosotsial'nyi organism*, *этносоциальный организм*) に変化するという。例えば、同じ狭義のエトノスでも、未開社会においては部族、封建社会では亜民族というエトノス社会有機体になる。特定の発展段階に対応したエトノス社会有機体とは異なり、狭義のエトノスはあらゆる社会形態の下で存在するとブロムレイは述べている。この狭義のエトノスとエトノス社会有機体の差異から民族と社会の発展過程の不一致を説明できるとし、ブロムレイはエトノスの発展に生物学的独自法則 (熱情性) があると説くグミリョフに反論した (Bromlei 1971 : 83) 7。

以上に見て来たように、エトノスの変化過程を自然科学的に説明しようとするグミリョフに対してコズロフとブロムレイは史的唯物論を擁護する立場から批判を行った。社会の発展段階の差異や狭義のエトノスと広義のエトノスの差異と言ったように説明原理は異なるものの、両者ともに史的唯物論を維持する立場から熱情性という「生物学的」法則を否定する点では共通しており、史的唯物論を巡る争点に限っては「生物学的エトノス理解と社会的エトノス理解の対立」という構図が成立していたと言える。

## 6. エトノスの遺伝的性質を巡る論争

最後に、本節ではグミリョフが提示した行動のステレオタイプ概念に見られる「生物学的」要素を巡る論争を分析する。グミリョフは行動のステレオタイプについて説明する中でこのコンセプトを行動遺伝学を用いつつ説明した。グミリョフによれば、人文学の世界で伝統と呼ばれるものが自然科学の世界では地域や個体群のレベルで分化する行動のステレオタイプと解釈されるという。そして、行動のステレオタイプ（すなわち伝統）は親や集団の年長者による養育プロセスを通して伝えられるが、グミリョフはこれを世代間の信号継承（signal'naia nasledstvennost', сигнальная наследственность）<sup>8</sup>であるとしている。グミリョフによれば、行動のステレオタイプの具体的内容、すなわち日常的技能、思考方法、芸術対象の認識、年長者の扱い、男女関係...といったものは全て生理学的な条件反射であり、条件反射であるが故に信号継承によって伝えられる。行動のステレオタイプ（伝統）について、族内婚と合わさることでエトノスに安定性を生み出すともグミリョフは述べている（Gumilev 1970a : 50）。

しかし、熱情性の場合と同様に、グミリョフの提起する行動のステレオタイプというコンセプトそのもの、そしてそれが養育や教育を通して伝えられるという基本的な内容自体は生物学的なものではない。行動のステレオタイプの具体例としてグミリョフが列挙する規範はいずれも社会関係に関するものである。これに対して、グミリョフは行動のステレオタイプが自然科学的に見れば個体群レベルで分化した条件反射パターンだとし、その継承を遺伝学的な信号継承だと解釈する。このように、必ずしも生物学的とは言い難い議論を遺伝学用語を用いて説明する点にグミリョフの特徴があり、このために議論が錯綜することとなった。

まず、ブロムレイからの批判を取り上げてみよう。既に述べたように、ブロムレイは行動のステレオタイプを心理的ステレオタイプと言い換えている。ブロムレイは、エトノスを規定する上で人種的特徴よりも文化の一体性の方が重要だと断った上で、心理的ステレオタイプが世代を越えた文化の再生産を可能にする理由について持論を展開した。ブロムレイによれば、文化の継承は生物学的遺伝ではなく個人の社会化（sotsializatsiia lichnosti, социализация личности）の結果であり、心理的ステレオタイプは生理学的な特性ではなく社会＝歴史的条件によって規定されるという（Bromlei 1970 : 53）。この箇所は行動のステレオタイプを信号継承で伝わる条件反射だとするグミリョフを批判したものだと言える。

ブロムレイは続けて、民族の特性が再生産されるのは心理的ステレオタイプによるのみではないと指摘する。彼によれば、民族的特性の世代間継承は心理的ステレオタイプを含めた心理的特性の全体、すなわち心理構造（psikhicheskii sklad, психический склад）によるものであるという（Bromlei 1970 : 54）。この心理構造という言葉はスターリンの民族定義にも見られる表現であり、田中克彦によれば民族的な性格と同義であるという（田中 2000 : 54-55）。その点ブロムレイは、ステレオタイプ化された民族的性格が形質のように遺伝するものとしてグミリョフの議論を受け取っており、行動のステレオタイプというコンセプトそのものが単に社会規範を指していることや、その継承がブロムレイのいう個人の社会化と実質的に同じものであることを見落としている<sup>9</sup>。

他方、ブロムレイ自身は、彼のエトノス定義に見られるように族内婚を強調している。ブロムレイによれば、社会組織の中には生物学的側面を有するものが存在しており、エト

ノスは人種と一致することはないものの、族内婚に由来する遺伝的障壁によって形成された個体群 (populatsiia, популяция) と重なるという (Bromlei 1970 : 55 ; Bromlei 1971 : 84)。このように、ブロムレイには遺伝からエトノスを説明し生物学単位たる個体群としてエトノスを捉える傾向が見られるのであり、ここでは「生物学的」なグミリョフと「社会的」なブロムレイという対立軸は成立していない<sup>10</sup>。

一方、アルタモノフによれば、グミリョフの議論におけるエトノスは人間集団内部の相互作用プロセスの中で発生するものであり、祖先から受け継がれた日常的実践によって発展した指標の同一性は養育・教育を通して伝わる。この要約を踏まえ、アルタモノフはエトノスが生物学的範疇ではなく社会的範疇だとしている。アルタモノフによれば、エトノスは不定形な構造であるため明確な輪郭を持たず、隣接する民族同士は頻繁に混交する。混交によって新たなエトノスが生まれる例として、古代スラヴ人とフィン人との混交から大ロシア人が、パルト人と混交からベラルーシ人が生まれたとアルタモノフは述べる。このように述べた上で、生物学的な仕方では人々は先祖から人種の特徴と心理的特質を受け継ぐが、どちらもエトノスを規定する指標にはならないと指摘し、諸民族の相違を景観や生物学的類型に帰するのは間違いだとグミリョフを批判した (Artamonov 1971 : 75-76)。これに対してグミリョフは、アルタモノフが東スラヴ人の分岐を混交、すなわち生物学的交配から説明していることについて、エトノスを生物学的範疇でないとする彼の立場と矛盾していると反論した (Gumilev 1971 : 82)。

以上に見て来たように、『自然』論争で重要なテーマとされたエトノス概念の遺伝的性質についての議論は、行動のステレオタイプをグミリョフが遺伝学的用語を用いて説明したことによって平行線を辿ることとなった。ブロムレイとアルタモノフは、グミリョフが述べた行動のステレオタイプの世代間継承についての議論を人種の特徴と共に伝わる民族性格の (形質上の) 遺伝だと捉えている。しかし、実際のところグミリョフのいう遺伝は形質に関わるものではなく、単に個人の社会化のメカニズムを行動遺伝学の用語 (信号継承) によって説明したものに過ぎなかった。むしろ、族内婚や混交を強調するブロムレイらの側により直接的な遺伝からエトノスを捉える傾向が存在していたと言える。

## 7. おわりに

『自然』論争では、まずグミリョフが言語や文化といった指標からエトノスを捉える立場を否定し、行動規範の差異を通して現れる各集団の民族意識を史的唯物論が強調する社会の発展段階やそれに規定された文化の反映としてではなく、景観への進化論的な適応や生物圏をエネルギー動因とする熱情性に由来するものと唱えた。これに対して、ブロムレイを始めとする論者は史的唯物論を擁護する観点から反論し、ソ連で初めてエトノスという用語をテーマに学者らの民族観が衝突した。本稿で見てきたように、この論争では①言語、文化などの指標からエトノスを定義できるか、②史的唯物論からエトノスの変化過程を説明できるか、③エトノスに遺伝学的性質があるか、という3つの論点が争われていた。従来これらの論点は共に「生物学的エトノス理解と社会的エトノス理解の対立」という表象の下で捉えられており、このことはグミリョフのエトノス論が生物学的で、これと対立するブロムレイのエトノス論が社会的であるという構図の原点となった。しかし、彼らの議論は「我々」と「彼ら」の対置の重視、景観や族内婚の作用を認める、シク教徒

や古儀式派をエトノスとするなど複数の点で共通していた。また、従来考えられてきた両者の内一方の議論が「生物学的」で他方が「社会的」という分類は部分的にしか成立していない（表1参照）。

表1. 論争の争点整理

	グミリョフ	ブロムレイ
先行研究における分類	「生物学的」エトノス論	「社会的」エトノス論
1. エトノス定義	主観的に意識される行動規範の差異を重視	言語、文化といった客観的特徴を重視
2. 史的唯物論	史的唯物論ではなく地理条件への適応や熱情性からエトノスの変化過程を説明 ⇒「生物学的」	史的唯物論を擁護し、社会の発展段階に合わせてエトノスは変化すると主張 ⇒「社会的」
3. 遺伝的性質	教育を通じた行動規範の世代間継承を条件反射の学習から説明 ⇒「社会的」	族内婚を重視し、エトノスを遺伝学的単位（個体群）と同一視 ⇒「生物学的」

実際、エトノスが社会的なものではなく（つまり、史的唯物論では説明できず）生物学的発展法則（熱情性）が存在するとグミリョフが主張したことは、必ずしもエトノスそのものが社会関係の所産であることの否定には繋がらなかった。この場合、エトノスの発展法則が社会の発展法則とは別物であると主張することは史的唯物論からエトノスを説明することを斥けるだけであり、行動のステレオタイプ言説に見られるようにエトノスを個人の社会化から説明することと矛盾する訳ではない。しかし、ブロムレイらはグミリョフの議論をそのまま生物学単位としてのエトノス概念の提唱と受け止めていた。特に、グミリョフが行動規範の世代間継承メカニズムを信号継承と呼んだことをブロムレイ・アルタモノフらが民族性格の形質的（人種的）遺伝と捉えたことで両者の議論は平行線を辿ることとなった。

エトノス定義もまた本論争の重要なテーマであった。ブロムレイ、アルタモノフ、コズロフは、グミリョフが融通無碍にあらゆる集団をエトノスと捉えることに批判的であった。一方、アルタモノフはエトノスを多様な形態を取る不定形な構造としており、基本的にはグミリョフと同様の立場に立っている。エトノスを狭義と広義にわけているとはいえ、このことはブロムレイにも該当することであり<sup>11</sup>、その点、いずれの論者も一定の基準を満たせばエトノスが多様な集団の形を取り得る（逆に言えば、あらゆる集団が潜在的にエトノスたり得る）と考えていた点では共通する。むしろ、グミリョフとの差異はそれらの集団がエトノスになる上での基準に対する理解であった。

ただし、グミリョフに反対する側でも民族理解が一致しているわけではなかった点には注意しなければならないと考えられる。その意味において、ある集団をエトノスと認定する基準にコンセンサスがないという現実が露呈したのが『自然』論争の特質だと言えるだろう。特に、ロシア民族学の特徴とされる原初主義的な「エトノス思考」の内容は実は「不定形な構造」をしており、多様な集団を民族と捉え得る柔軟性を秘めるものだった。ただし、この論争を通して露呈したエトノスを一義的に定義し得ないという現実はソ連民

族学の破綻を必ずしも意味するものではないと考えられる。むしろ、状況ごとに多様な定義基準がアドホックに作用し、民族というステータス<sup>12</sup>を求める集団をそのつど原初主義的単位として捉え直すプラグマティズムを反映しているのではないだろうか。後にブロムレイとグミリョフは共に民族的帰属の多層性に注目しエトノスを複数の階梯からなるヒエラルキー状のシステムだと主張したが<sup>13</sup>、この独特な議論の基礎には『自然』論争で見られた不定形な民族理解が隠れているのである。

付記：本稿は 2023 年度ロシア史研究大会での口頭発表に基づいて作成された。また本稿の執筆に際しては JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けた。

## 注

- 『自然』論争から約 20 年後、1988 年の『旗 (Знамя, Знамя)』誌にグミリョフが掲載した論考を契機として両者の間で 2 度目の論争が行われた。その際、ブロムレイは「私たちの昔からの論争」が 1970 年の『自然』から始まったと述べている (Bromlei 1988 : 230)。
- 他方、コレニャコによる整理は必ずしも論争の実態を正確に反映したものではない。例えば彼は『自然』1970 年第 8 号に寄せられたレビューがグミリョフに好意的であるとしている。しかし、確かに論文の末尾こそ好意的な文言を述べているものの、これらのレビューの内容はグミリョフに対して批判的である。また、1971 年の特集でグミリョフへの批判論文を寄せた一人とされる Iu. K. エフレモフに至っては、グミリョフが扱うデータの恣意性を批判している箇所を除けばグミリョフに賛成する論調を張っていた。エフレモフは後に、自分は本来グミリョフの熱心な支持者であったが、ブロムレイによって反グミリョフ・キャンペーンに利用されたと述べている (Efremov 2012 : 146)。
- ソ連地理学において地理的景観とは「他の領域とは質的に異なり、自然の境界を有し、完全かつ法則的な物体と現象の総体を各々がなす地表の領域」とされた (Kalesnik 1957 : 6)。
- 他方、アルタモノフのように熱情性概念に見られる生物学的説明を度外視する論者にとっては、少数者による社会関係の変容というグミリョフの議論は「英雄と大衆」(N. K. ミハイロフスキー)のような前衛党的議論の焼き直しに過ぎなかった (Artamonov 1971 : 76-77)。グミリョフはアルタモノフの指摘を歪曲であるとし、熱情性のエネルギー動因たるヴェルナツキーの生物圏理論を無視していたとした (Gumilev 1971 : 82)。逆に言えば、エネルギー動因に関する生物学的粉飾を取り払うならば、熱情性のコンセプトは「英雄と大衆」論に限りなく近づくのである。
- 加えて、アメリカの黒人がエトノスに近いとする点で、コズロフは人種集団が民族に近似することを暗に認めている (Kozlov 1971 : 73)。
- 『家族、私有財産、および国家の起源』は L. H. モーガンらの文化進化論に影響を受けた著作で、社会の発展段階に応じて人間集団が氏族から部族、亜民族、民族へと変化するという理論的枠組みの基礎となった (Hirsch 2005 : 44-45)。
- ブロムレイは後に狭義のエトノスをギリシア語の形容詞形から「エトニコス」と呼んだ。ブロムレイによるエトニコスとエトノス社会有機体の分離は、民族の原初主義的性質と史的唯物論に見られる社会構築主義的観点を融和させる機能を果たした。例えば、政治共同体としてのウクライナ民族は資本主義および社会主義段階において形成される一時的存在である一方、文化共同体としてのウクライナ・エトニコスは原始社会から現在までの全ての発展段階に存在するとブロムレイは考えた (Bromlei 1973 : 40)。
- 信号継承は遺伝学者 M. E. ロバシェフが提唱した用語で、I. P. パヴロフの条件反射研究とともにグミリョフの行動のステレオタイプ概念に影響を与えた。グミリョフは自分がエトノスの生物学性を遺伝学的側面ではなくパヴロフが提唱した条件反射システムに見出していると述べた (Gumilev 1970a : 50, Gumilev 1971 : 80)。
- 「心理的ステレオタイプ」という言い換えからも窺えるように、ブロムレイはこの語のステレオタイプの側面に注目しており、行動のステレオタイプが(共同体規範ではなく)ステレオタイプ化された民族性格を指していると考えていた。しかし、1967 年にグミリョフが初めてエトノ

- スについての著作を発表した時点では、この同じ概念は単に「行動」と呼ばれていた (Gumilev 1967)。これに対して、ステレオタイプという表現はパヴロフの研究に影響されたものと考えられる。パヴロフは条件反射システムを動的ステレオタイプとも呼んでいたが、N. D. レヴィトフによれば、このステレオタイプという呼称は条件反射の反復性と自動化傾向を指したものであるという (Levitov 1963 : 22)。グミリョフはパヴロフの議論を援用する過程で共同体規範 (行動) をオートマチックな条件反射と捉え、行動のステレオタイプと呼び直したと考えられる。
- 10 族内婚とエトノスの関係をテーマとした論文末尾の英語要約の中で、ブロムレイは民族共同体を人類学的集団 (anthropological group) だと述べている (Bromlei 1969 : 91)。ブロムレイがロシア語で書いた元の要約を翻訳した M. Ia. ベルジナによれば、これは個体群 (populiaciia, популяция) の英訳であるという (Sovetskaia etnografiia 1970 : 90)。
  - 11 1973 年の著書においてブロムレイは、アルタモノフ論文のうちエトノスを不定形な現象とする箇所を脚注で参照しつつ、エトノスの構造は社会制度によって形成されるのだと述べた (Bromlei 1973 : 38)。その点、彼はエトノスが任意の社会制度と結びつくことで多様な形態を取ると考えていたと言える (ブロムレイはそうした制度として「家族から国家に至る社会共同体」を挙げている)。ブロムレイは両者の結合の延長上にエトノス社会有機体を位置付けた (Bromlei 1973 : 38-40)。
  - 12 「アフアーマティブ・アクションの帝国」 (マーチン 2011) であったソ連では民族は一種の身分単位であり、民族ごとに自治領域などの権利が与えられたのみならず、民族籍が国内用旅券に記載されていた。池田嘉郎によれば、1905 年革命以降、身分などを基礎とするロシア帝国のコーポラティヴな統治構造に民族的要素が加わり、後に自治的な諸民族から成るコーポラティズムがソ連に引き継がれたという (池田 2014 : 169, 185)。また G. フリーズによれば、ロシア帝国における基本的なステータスであった身分の内実もまた不定形な性格をしていた (Freeze 1986)。
  - 13 特にグミリョフは、ロシアをヒエラルキーの頂点に位置するスーパーエトノス (superetnos, суперэтнос) と見做し、その内部にウクライナを含む諸エトノスが包摂され、歴史的に不可分のシステムをなしていると主張していた。グミリョフのエトノス・ヒエラルキー論については、三栖 2024b を参照。

## 引用文献

池田嘉郎

2014 「コーポラティヴな専制から共和政の帝国ソ連へ」『第一次世界大戦と帝国の遺産』山川出版社、東京、166-190。

井上紘一、内堀基光、川田順造、黒田悦子、松原正毅

1991 「民族学からみた民族 (共同討議)」岡正雄・江上波夫・井上幸治編『民族の世界史 1 民族とは何か』山川出版社、東京、179-242。

井上紘一

1995 「ナーツィヤ」『世界民族問題事典』平凡社、東京、618。

田中克彦

2000 『「スターリン言語学」精読』岩波現代文庫、東京。

2001 『言語からみた民族と国家』岩波現代文庫、東京。

マーチン、テリー

2011 (半谷史郎監修、荒井幸康、渋谷謙二郎、地田徹朗、吉村貴之訳)『アフアーマティブ・アクションの帝国 ソ連の民族とナショナリズム、1923 年～1939 年』明石書店、東京。

三栖大明

2024a 「生物学的エトノス理論家グミリョフ」の誕生とエトノス理論再考の可能性—ソ連民族学の歴史的観点から」『ロシア史研究』112:57-84。

2024b 「L. N. グミリョフのエトノス定義と階梯的民族観」『スラヴ研究』71:33-54。

Anderson David G., Alymov Sergei S. and Arzyutov Dmitry V.

2019 Grounding Ethnos Theory: An Introduction. In David G. Anderson, Sergei S. Alymov and Dmitry V. Arzyutov (eds.), Life Histories of Ethnos Theory in Russia and Beyond, Open Book Publishers,

- Cambridge, 1-19.
- Artamonov Mikhail. I. A.  
1971 Snovo «geroi» i «tolpa»? Priroda 2: 75-77.
- Arutiunian Iurii. V. et al.  
1998 Etnosotsiologiia: Uchebnoe posobie dlia vuzov, Aspekt press, Moscow.
- Bassin Mark  
2016 The Gumilev Mystique Biopolitics, Eurasianism, and the Construction of Community in Modern Russia, Cornell University Press, Ithaca.
- Bromlei Iulian. V.  
1969 Etnos i endogamiia. Sovetskaia Etnografiia 6: 84-91.  
1970 K voprosu o sushchnosti etnosa. Priroda 2: 51-55.  
1971 Neskol'ko zamechaniï o sotsial'nykh i prirodnykh faktorakh etnogeneza. Priroda 2: 83-84.  
1973 Etnos i etnografiia, Nauka, Moscow.  
1988 Po povodu odnogo «Avtonekrologa». Znamiia 12: 229-232.
- Efremov Iurii. K.  
2012 Slovo o L'Ve Nikolaeviche Gumileve. In G. A. Bordovskii et al (eds.), Lev Gumilev: pro et contra, Nauchno-obrazovatel'noe kul'turologicheskoe obshchestvo, Saint Petersburg: 136-151.
- Freeze Georgy. L.  
1986 The Soslovie (Estate) Paradigm and Russian Social History. The American Historical Review 91(1): 11-36.
- Gumilev Lev. N.  
1967 O termine «etnos». Doklady otdelenii i komissii geograficheskogo obshchestva SSSR 3: 3-17.  
1970a Etnogenez i etnosfera. Priroda 1: 46-55.  
1970b Etnogenez i etnosfera. Priroda 2: 43-50.  
1971 Etnogenez-prirodnyi protsess. Priroda 2: 80-82.  
2018 Konets i vnov' nachalo, Izdatel'stvo AST, Moscow.
- Hirsch Francine  
2005 Empire of Nations Ethnographic knowledge and the making of the Soviet Union, Cornell University Press, Ithaca.
- Kalesnik Stanislav. V.  
1957 Kratkii kurs obshchego zemlevedeniia, Gosdarstvennoe izdatel'stvo geograficheskoi literatury, Moscow.
- Koreniako Vladimir. A.  
2006 K kritike kontseptsii L. N. Gumileva. Etnograficheskoe obozrenie 3: 22-35.
- Kozlov Viktor. I.  
1971 Chto zhe takoe etnos? Priroda 2: 71-74.
- Levitov Nikolai. D.  
1963 Psikhologiia truda, Gosdarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo Ministerstva prosveshcheniia RSFSR, Moscow.
- Priroda  
1971 Diskussii Etnogenez i etnosfera. Priroda 2: 71.
- Sokolovskii Sergei. V.  
2022 Zhizn' posle zhizni, ili o kontseptsiiakh etnosa i etnichnosti v rossiiskikh sotsial'nykh naukakh. Etnograficheskoe obozrenie 6: 111-114.
- Sovetskaia etnografiia  
1970 Obuszhdenie stat'i Iu. V. Bromleia «etnos i endogamiia». Sovetskaia etnografiia 3: 86-103.
- Verkhovtsev Dmitrii. V.  
2022 Etnos post-mortem: sovetskie teorii etnosa v sovremennom russkoiazychnom diskurse. Etnograficheskoe obozrenie 6: 79-101.